

親族称呼の体系の崩れるとき

——奄美大島大和浜方言研究ノートⅡ——

須山名保子

はじめに

- 一、背景社会の身分制度
- 二、親族称呼に干渉する階層意識(一)
- 三、親族称呼に干渉する階層意識(二)
- 四、親族称呼擬似的用法の影響
- 五、親族称呼転用の限界
- 六、親族称呼の運用面(一)——待遇表現との関係——
- 七、親族称呼の運用面(二)——誰を原点として呼ぶか——
- 八、親族称呼成立の一例——シューについて——
- 九、親族称呼の構成原理
- 十、親族称呼の近代化——ヤマとグチの移入——

はじめに

仮に七十年の天寿を全うするとして、人はその一生を過ごす間、自分の使う言葉が微妙に変化して行くさまを、感ぜずにはいられないだろう。ほぼ同じ土地に暮らしていても、自分も、自分の周囲も、

いつのまにか「昔と違う」言葉を使っている。折に触れてそういう感慨を持つであろう。人によってその感慨が、反省であったり憤りであったり、あるいは嬉しみてであったり、異なる形をとるにせよ。

言葉と言ったのでは余りに漠然としている。今私がつり上げたいのは、人間関係を指す言葉であり、その内でも特に親族語彙と呼ばれるものである。ただし、親族語彙とは親族関係のみを捉えるものではない。日本語では、親族関係以外の人間関係によって作られる社会の場においても、親族称呼は拡張して用いられる。オネエサンはすなわち《若い娘》である。共通語であれば年齢層、世代層表現の範囲までを考への対象としなければ、親族語彙の運用面を正しく捉えることにならない。

オカミサンは普通の町の商店からは今日ほとんど姿を消した。本来貴人の家の妻という地位の要素を含んでいた語ゆえに、その地位の要素が徐々に下落して一般には遠ざけられた。現代に生き残るオカミサンは、伝統を誇る商家や格式を競う高級店や、花街の女あるじのものであろう。下落させずにとどめていた場で生命を保っているのは納得が行く。この様相は、戦前に物心ついた世代には、よく

解っている。

変化は徐々に起こるばかりではない。殊に親族語彙ともなれば、社会組織、家族制度のあり方等と密接な関係があり、社会の大きな変革期に背景社会と共にあらわに変わる。近代の日本では、明治維新と第二次世界大戦の二時期は変わり目として大きい。

南島の小さな村落では、変革は顕著なありさまを見せる。

奄美大島は、その近世を本土とは非常に異なる形態で辿っている。薩摩国島津藩の支配下において、少ない耕地面積を用いて米よりも砂糖を産することに民力を注ぎこむことに政治目的が偏っていた。その体制は一般島民にとっては不幸であったとしか言いようが無い。一握りの数の島出身の役人層が、支配側として富み、明治期を迎えた。

明治三十五年生まれの長田須磨氏は、この曾ての支配層たる旧家の出である。長田氏が生家の没落に遭われたのは、個人としては不幸な運命であった。しかし、さまざまな困難に出会われたことは、変転甚しい時代において、現われる数々の事象を、しっかりと見て取る意識と、記憶にとどめる活力とを長田氏の内面に育てた。その意味では逆境もまた意義を生んだと言って許されるであろう。

その長田氏の記憶を元に、私は奄美大島の一方言の調査研究を続けているが、小考は、長田氏が幼い頃から今に至るまで、常に気を遣って使い分け、使いこなして来た親族称呼の複雑な様相を、一つの語彙体系の崩れる過程に見せる現象として捉え、そこに働く原理をつきとめようと目指すものである。

以下の叙述では、長田氏を含めて全ての人物名を頭文字のみで表

わすことと、敬語表現を省略することをお断りしておく。

一、背景社会の身分制度

〇が子どもの頃、夕方遊びから戻る時、出会う相手が旧習を重んじる村人であれば、

Rasjokwa, nama modorinsjorjoori naa?

《お婆さん、今 お歸りでいいはず かい?》

と、丁寧な挨拶が送られて来る。手足まっ黒に遊び疲れた少女にとって、村人の礼儀正しい言葉は面映ゆかったものだ。

五歳年上の〇の長兄は、同級生からも sjunna 《若旦那さま》と呼ばれた。〇自身も、遊び友達からは naa 《あなたさま、あなた》で話しかけられるのに、その友達に対しては naa 《あなた、おまえ》で答えていた。出自の家の格は、明治三、四十年代には、学校という新しい場でもまだ意識されていたわけである。弟妹たちになると、出入りの人々に坊ちゃん sjunakwa 等と呼ばれた記憶も豊かでない。長兄と末妹の間にはおよそ十五、六歳の年齢の開きがある。家のありようも、その間に大きく変わっている。

明治の奄美の社会は、旧時代の身分階層を忘れ去ってはいない。幕末鹿児島から赴任して来る代官の統べる奄美で、島人として最も高い地位は、間切り magri という広い行政区画の長、与人 juriin であった。横目 jujunri がそれに次いだ。(間切りは琉球支配の遺構であり、與人・横目等の役職は島津藩支配時代になってのものである。) サトウキビづくりに徹するよう統制された農村社会で、行政

一面の権力を片手に握ることは、もう一方の手で経済力をも操れることであった。開墾による土地の私有化が可能であり、サトウキビの余剰分を私有物 *zimou* とすることも出来る。そんな有利な条件は、一地域にごく少数の、これら島出身の役人へのみ許された。先立つ時代から続く旧家もあれば、比較的新興の勢力も混じっていたが、この役職を持つ富裕な地主階層を、*Johnaou* また *John* と言う。(ヨハリは「由縁」は「良」に対応する形である)。本土の武家社会身分制度の中では郷士格ごうしかくといつて準士分であり、島津藩の士分とは一線を画されていた。名字を許されても帯刀は許されない、というように。しかし島人の中では特別選ばれた存在であった。

ヨハリツチュの家には、多数の奉公人が隷属していた。*Yaharichu* である。(家の人)という形に対応する。)ヤンチュの起源や沿革の詳細は文献資料の極端に乏しい奄美のことと明らかでないが、幕末期には、巷間に言い伝える林家のごとき勢い盛んな家では、百人、二百人もヤンチュを抱えていたという。島の人口の上でも、ヤンチュの占める割合は大きい。この、数に物を言わせた労働力が、ヨハリツチュの富をふやすのに、大いに役立っていた。(明治五年の人身売買禁止令発令によって、ヤンチュは何年がかりかで解放される。)

財政的に健全な農村ほど自作農の数が多いであろうが、奄美の村では、わずかな土地を所有してまがりなりにも自立する農家は、数が少なかった。それも砂糖の重税に喘ぐ貧農が多い。*nahaSechin* とよばれるこの階層は、その名称「中手人」が示すように、ヨハリ

ツチュとヤンチュの中間にあつて、かなり不安定な存在である。上下二層と対立させた中層と捉えるにふさわしいか迷いを残す、流動的な存在である。何となれば、ナハテツチュが困窮すると、ヨハリツチュから借財を重ね、返済出来ぬ場合はその家に身売りしてヤンチュになつてしまふということがよくあつたからである。ここでいう借財身売りの身代金とは全て貨幣でなく砂糖であるが、一旦身売りしたら一生その身分から抜け出せないくらいの高利率に身を縛られて暮らすことになるのだつた。

まれまれ豊かになる機が重なつて、もとのナハテツチュからヨハリツチュに成り上がる家も無いではない。逆に、衰退したヨハリツチュが、昔の誇りに苦しみながらナハテツチュの身分に甘んじる場合もある。

何世代を一つ身分で通せば、それがその家の格として定着するかは、通時的な意識の調査の困難な現状では想像の域を出ることが出来ない。

三つの名称のあるままに、経済力の差による上中下三層を奄美の旧社会に捉えることは、わかり易い方法ではある。

たゞ、自由を主家に買われた身分である奴隷的存在のヤンチュが、その身分さえ肯定してしまえば、生活の面では最低線の保証された、責任の無い、ある意味では気楽な暮らしを送るのに対して、貧乏との戦いに終始する多くのナハテツチュの生活は、主家の威を借るヤンチュの軽侮の対象になるくらいであつたという。ナハテツチュが自家の農業経営の要を結局はヨハリツチュに握られている点を考え、ヨハリツチュに対して弱者の位置にあることから、この二者を下層として、ヨハリツチュの上層に對せしめる考え方を私は曾て

試みた。^{注1}

親族称呼について論じるに先立って、身分制度に関して紙幅を費して来たのは、両者の間に密接なかわりあいがあればこそである。

身分の差は称呼の別を決定する。それは、見方を変えれば、称呼の別に反映している差こそ身分差（の意識）の種類だと言えよう。

二、親族称呼に反映する階層意識(一)

一家の主婦が周囲の村人から何と呼ばれるかによって、その家の格を上下二層のいずれであるか規定する方法が、奄美にはある。家族の間で、あるいは親族間で、相手との関係如何によって様々な称呼を以って呼ばれる主婦も、親族関係の無い村人一般からは、親族称呼からの転用である *ʔaqsje* 《奥さま》・*ʔago* 《母ちゃん・かみさん》のいずれかで呼ばれるのである。一人の主婦が、ある時はアッシュェよばれ、ある人からはアゴとよばれるということは絶対に無い。アッシュェとアゴとは用いられる対象の範囲が画然と二分されてゐる。この違いを捉えた *ʔaqsjebiki* じ *ʔagobiki* じこう二つ *hiki* 《系統》が、家の格差を表わす役をしてゐるのである。

ヒキは元來血筋を表わす語である。そしてアッシュェビキ・アゴビキの差は、現在かなりその意識が薄れたとは言え、結婚の縁組に当たっては問題になり勝ちである。今も同じ島出身の人どうしの婚姻の成立し易い環境では、家意識を振り捨てた男女個人の結びつきが、本土の都市部に比べて成り立ちにくい。三いとこ（祖父父母世代がいとこどうし）、四いとこ（曾祖父父母世代がいとこどうし）までも親戚付合いを大事にする島の気風から言つても、家々の身分格差は

関係	直系尊族			両親		きょうだい							
	曾曾	祖祖	父母	祖祖	父母	父母	長兄	兄弟	次兄	兄弟	本人	弟妹	
呼称 名称	上層	huu <u>huqsju</u>	hu <u>qsju</u>	zjuu	'jakumī ʔaqsje (ʔasjeqkwa)	○'jakumī			△ʔasjeqkwa			○(名前)	
	下層	huu <u>hannje</u>	han <u>nje</u>	ʔanma								△(名前)	
説明 名称	男	上層	huuʔuzju	ʔuzjuu	ʔazja	'janmī	○'janmī					○(名前)	
		下層	huuhunma	hunma	ʔago	ʔagoqkwa	△ʔagoqkwa					△(名前)	
説明 名称	女	総合			'jenga (hoo) 男 'onagu 女	nuʔo'ja (の)親	やや古い 言い方	seza 'jeheri 兄弟 'onari 姉妹				ʔuʔutu の年下	'jeheri 'onari 兄弟 'onari 姉妹
						'jenga 'onagu 男 'onagu 女	nuseza の年上						'jenga 'onagu 男 'onagu 女
総合				taaʔo'ja								kjoode	

表 I 「呼び分け」親族称呼の原型

表の注(1) このグループは、呼称と名称と区別がない。

(2) このグループの語彙は、他の親族の呼称に拡大して用いられるし、立場称呼にも転用される。

すぐ意識される。

アッシュェビキ・アゴビキ二系統の家の格意識の発生は、前節のヨハリツチュ・ナハテツチュ・ヤンチュという職業経済面に立脚する三層の身分意識のそれに先行するものと考えられる。

奄美の親族語彙の一部には、階層によって異なる語を用いるものがある。直系尊族ならびに同世代傍系親族の一部(きょうだい)の称呼が、それである。(「呼び分け」グループと、これを称する。)明治後半の呼び分け方の実状は、数多くの家族単位に見て行くと極めて複雑である。そこで、性別・年令(世代・輩行)等の要素を具に単純な形に整理してみると、表Iのような上下二層の呼び分けの仕組みが明らかとなる。

一家族を構成する要であり、世間に対しては一家を代表する顔となるのは、家長と主婦の夫婦である。家庭内では子どもから《父・お父さま》と *Fanna* 《母・お母さま》で呼ばれ、他人からは *zjuu* 《旦那さま》と *Paosje* 《奥さま》で呼ばれるのが、上層の夫婦である。一方子どもたちから呼ばれるときも他人から呼ばれるときも同じ *Pazja* 《父ちゃん》と *Pago* 《母ちゃん(かみさん)》なのが、下層の夫婦である。*zjuu*, *Pazja*, *Pago* は親世代を表わすにも、家長・主婦としての対社会位置を表わすにも同じ語が用いられているのに比べて、ひとり上層の母親のみは、主婦としての面からとらえられるとき、別語がとってかわる。この特徴を捉えたところで前述のアッシュェビキ、対するものとしてアゴビキの二系統が認識されたのかと思われる。

三、親族称呼に反映する階層意識(一)

ところで明治期における「呼び分け」称呼の呼び分け方の実態は、表Iに見られような画然としたものではない。親世代の称呼に子世代の称呼が入りまじるなど、一見統一のとれない姿を見せているかのようである。問題になる親世代の称呼に焦点をしばって考察したい。

まずアゴビキの夫婦が必ずしも *Pazja* と *Pago* の組み合わせでないことが指摘される。

たとえばOの実家F家に親しく出入りしていたY家であるが、子どもたち(Oと同世代)は、父親をアジャ、母親をアンマと呼んでいた。Oはその母に做ってその主婦をMアンマと呼んだ。(ちなみに、Y家の子どもたちのことを、OはY、U、と名を呼び捨てにしていたが、村人たちは、Yアゴックワ、Uアゴックワと言った。アゴックワは表Iに見るとおり、母主婦がアゴの家での娘たちの称呼である。)

このY家の主婦M女は、礼儀作法、言葉遣い全てにわたって折目正しい人で、*Oneja* ^{注2}に住んで、*nono* ^{注2}の神を拜んでいた。平家の落人の子孫であると称し、それを誇りにしていた。M女はその実家が現在ナハテツチュであつても、曾ての上層から没落したという家系をその親たちから聞かされて育つたのであろう。子どもたちに自分をアンマと呼べせた(アゴと呼ばせなかった)のは、自分もその母親をアンマと呼んでいたのかもしれない。

しかし、M女の兄は村人たちから *I Janzi* ^{注1}(表I参照)と呼ばれ

ているし、娘のU女は自分の出自をはっきりアゴビキと称している。

M女は、自身の誇りとは別に、他者からアッシュエとは呼ばれ得ないアンマなのである。村人たちは、彼女をMバツケエと呼ぶことで、この中間的存在を巧みに捉えてみせた。M女の孫の代になって、アッシュエビキから嫁が来たと、その家の人が喜ぶのを聞くと、二系のヒキ支配の根深さを感じずには居られない。

Jamni が本来はアジャを家長とする家であって子goと同世代・年長の男子を呼ぶ語であったことはまちがいない。すなわち一家族の中では《兄・兄ちゃん》である。ところがいつからか、このヤンムキを《家長・父・父ちゃん》とする（アゴを《主婦・母・母ちゃん》とする）家庭が出来て、明治期に到っている。ゆえに家長称呼を中心に考えれば、上ジュー、中アジャ、下ヤンムキの三層構造が考えられる。

この三層は前代旧身分制度に解説したトチュの別の反映であって、ほぼ安定したジューを家長とする層ヨハリツチュに對して、不安定な（多くはナハテツチュからヤンチュヘという方向の流動であったが）ナハテツチュ・ヤンチュの二分化に、世代の上下を層の上下関係に転用したものである。

ただし、この三層化は、《主婦・母》をはじめ、《祖父母》や《きょうだい》の関係までも截然と呼び分けるだけのエネルギーが働かない内に、背景の身分制度そのものが取り除かれた時代に移ったので、中途半端なものに終わった。

そして明治期の家長Ⅱ主婦の組み合わせ・子どもから見た両親の称呼は、ジューとアンマ（アッシュエ）を除くと、アジャとアンマあ

り、アジャとアゴあり、ヤンムキとアゴありと、いかにも過渡的な様相を示す。

過去の二重の階層意識が生み落とした親族称呼を、近代化の漸進する大正昭和期の奄美村落社会がどのように改変してゆくか、視線を先に遣る前に、なお時代を明治期にとどめて、まだ扱っていない傍系親族の語彙にも触れておかねばならない。

四、親族称呼擬似的用法の影響

おじ と おばあ おじいちゃん おばあちゃん は親のきょうだいである。《おじ・おじさん》《おば・おばさん》を表わす。呼称・名称の別が無い点では前の「呼び分け」グループに等しい。しかし、どの階層にも用いられる点で、うジ・バツケエ組は今日に到るまで生命力を失わないことばなのである。また次節で扱う親族称呼の転用面でも活躍する。

他の傍系の称呼を見るに、名称においては階層による呼び分けが無いので階層意識からの解放が期待されるが、呼称面——特におじと同世代の親族を呼ぶのに、きょうだい称呼を拡大して用いるので、実際には階層意識から一歩も離れることが出来ない。（詳しくは表Ⅱを参照。）うジ・バツケエ組の存在の価値が改めて感じられる。

傍系称呼のうち注目すべき点の一つは、配偶者の両親を捉えるのに、名称呼称共うジ・バツケエ組を用いる点であり、本土共通語の（義理の）親という感覚とは大いに異なる。

注目すべき点の二は、傍系親族を呼ぶ実際の場では、世代別親族関係と称呼とが、表Ⅱに見られるような画然・整然たる対応を示していない事実が多々あることである。（表Ⅱの題に「原型」という語

世代	親 世 代		きょうだい(同)世代		子 世 代		孫 世 代	
名称 呼称	名 称	呼 称	名 称	呼 称	名 称	呼 称	名 称	呼 称
関 係 呼	親の年・親の年少兄 長兄弟 弟 《おじ》 'uzi·'uziqkwa 親の年・親の年少姉 長姉妹 妹 《おば》 baqke·baxikwa	〔年長〕	いとこ(男) {('jenganu)}	〔年長〕 {O'jakumī Δ?asjeqkwa}	きょうだいの息子《甥》 'u'i きょうだいの息女《姪》 mī'i	O(kwa) Δ(kwa)	誰々の μaga 《孫》 という	O(kwa) Δ(kwa)
			いとこ(女) {('onaganu)}					
	親のいとこ(男) ?iθoxo'uzi 親のいとこ(女) ?iθoxobaqke	〔年少〕	親どうしがまたいとこ mii?iθoxo	〔年少〕 {O'janmī Δ?agoqkwa}	またいとこ以下の遠縁 同世代の人の息子・息 女の名称は無い			
			配偶者の父《舅》 sītu'uzi 配偶者の母《姑》 sītu baqke		祖父母どうしが またいとこ 'ju?iθoxo			
			配偶者の兄弟 {sītu'jeheri}					
			配偶者の姉妹 {sītu'onari}					

表 II 傍系親族名称と、その呼称の原型

を入れたのはそのためであった。)

実例を挙げれば、上層F本家の家長Yは、自分と同年齢の叔父(F分家庶出)Bを名前で呼び捨てにし、BはYのことをヤクムキと敬称をつけて呼んだ。世代の原則から言えば、Bこそウジを以てYから呼ばれ、YはBから名前を呼び捨てにされるべき関係にある。世代よりも家格を優先させ、しかも同年齢を先輩に置きかえさせるほど、本家嫡出の家長たる位置は、分家庶出の立場に対して、強力に働くものなのである。呼称という相互認識の場でそれが著しい。

さて前記本家の娘であるOは、F分家Bの息(Oにとつて世代は上だが同年齢。関係はいとこウジ(父のいとこ))をヤクムキと呼んだ。これも世代無視を引継いでいる。

なおヤクムキ・ヤムキの用法で見落としてならないのは、妻が夫のことを親類に向かって話題にするときに、この《同世代年長男子》の称呼を用いることである。家庭内では妻は夫をジューと呼ぶ。子らも使用人たちもジューと呼ぶのであるからそれは極めて自然である。ジューと呼びかけジューで話題にする。全く遠い人——たとえば本土から来た役人など——に対しては名前を以て話題にしたであろうが、親類に対してジューで話をしては自分の身内である夫を敬しすぎて、相手に対して礼を欠く。呼び捨てにするには家長の位置は——妻と夫とは旧家族制度の中では決して対等でない——大き過ぎる。その事情を微妙に汲み取って、ヤクムキ称呼が使われたと言えよう。逆に夫は妻を話題にするときも呼びかけるときも、名前を用いること一本でよい。(本土でよく見られるように呼びかけに《お母さん》に相当する語を用いることはなかった。)目上目下の関係は夫と妻の間ではつきりしていた。

五、親族称呼転用の限界

親族称呼が年齢層の表現に転じて用いられる傾向は本土共通語に著しい。

「おは、さんはひどいなあ。おねえさんて呼んでよ」(製菓会社のCM)

という類である。親族称呼が世代や輩行を一つの軸として成り立っているから、年齢階層表現へ転化することは日本語としては自然な推移である。この転用は虚構的用法と称されている。

大和浜方言には、厳密には右のような意味の転化が見られない。親族称呼が、親族関係の存在しない村人一般、他村の同層知人などによっても用いられることは確かであるが、たとえば《おじさん》のウジが中年男子を中心とする年齢層一般の称になつていのか、*hanto* が「もうおばあさんと言つていい年だ」という文脈に用いられるかと問えば、答は否である。

表Iと表IIに録された親族称呼は、そのほとんどが他人からの呼称にも転用される。その転用は、年齢層への転化ではなく、家庭が外の社会と接するときの立場表現にとどまる。家と家とが接触するときの捉え方であるから、一親族の内部での血縁関係を言うよりも、一層家の格意識があらわにならざるを得ない。

上層男子の三世代の称呼を例にとつて調べてみよう。

男子称呼の中心的存在は《父・お父さま》なるジューである。一家の中に *houshi* 《祖父・おじいさま》やヤクムキ《兄・お兄さま》は、複数存在する場合がありますが、このジューは一家に唯一人の存在である。

そのジュニーは、目上の人——家族内ではジュニーの父母たるフツシユヤハンニエ——からは、目下の者に対する呼称の原則に違わず、個人の名前を呼び捨てにされる。そして同世代同層の親族——別に一家を構えているきょうだいやいとこたち——からは○ヤクムキと名前に呼称を添えて呼ばれる。

この○ヤクムキという呼称は、今のジュニーが子世代だった時に獲得したものであり、その後も同世代同層の間では、年齢がふえ立場が変わっても、変わらずに続けられて来たものである。一家を構え、子を生し、ジュニーと家族から呼ばれても、同じ世代のきょうだいやいとこたちからは、いつまでもヤクムキで呼ばれる。

ここまではヤクムキは純然たる親族呼称である。きょうだい、いとこ、またいとこ……というように、関係には幾段階あるにせよ、その用法においては、《若い世代》という要素よりも《同世代》という要素が第一義であるという見込みの成り立つ呼称である。

ところが、ほとんど親類関係の薄まった間柄では、世代を無視した用法も存する。

遠縁のT家のジュニーを、年下のF家のジュニーは○ヤクムキと呼んだが——そしてその呼び方は当然の理に基くが——F家の娘であるOまでが、その人を父親と同じく○ヤクムキと呼ぶべくしつけられていた。

遠縁ではっきりした血縁関係は意識しないから、○うジと呼ぶことは出来ない。家の格から見れば、F家が与人として最高の家柄であるのに対して、T家は一段下がった横目の家柄であった。ヤクムキという呼称の持つ親しさ、心やすさ（それは《同世代》という意義特徴が働くからであろう）を、地位の些かの軽さに横にりさせて、

上世代（ここでは親世代）のやや下の格の家の男子、という捉え方を呼称に用いた、と見られる。

同村の上層の家は、ほとんどが親類どうしである、という背景社会の実状も考え合わせる必要がある。T家を他村の上層で全くの他人の家として見るのであれば、F家の父も娘も、先に挙げた人物をT家のジュニーと呼んだであろう。そしてその人がもつと年を取ればT家のフツシユと呼ぶであろう。縁が近ければ近いほど正確な立場に基く呼称を用い、遠くなるほど世代をずらせるなどの転用を敢えて行つて、僅かな身分差等のニュアンスを表現するという傾向が見られるのである。

中下層の家長たちを、村人一般が呼ぶ場合、また上層の家の人が呼ぶ場合はどうなるか。この場合もまた互いの身分関係に世代・輩行の関係がかけ合わされた使い分けが要求される。

たとえば旧家F家に曾てヤンチュとして暮らしたXは、その能力を買われてヤンチュの監督役 *nusupini* を勤め、解放されて自立したのちも、主家の農業経営の差配を委せられた人だが、主家のみならず村人たちからの信任も厚かった。ヤンチュの出ということに皆が承知していたにもかかわらず、村人たちは彼をXうジと呼んだ。主家F家の主婦や娘はXアジャと呼んだ。ひとりF家の家長のみがXと呼び捨てにし得た。

中・下層の家長は前述のようにアジャとヤンムキであり、村人たちからもそのままアジャと○ヤンムキで呼ばれることが普通だが、その上に○うジという段階が、敬意をこめて使われる。ナハてツチュでアゴビキのY家の主婦M女が、村人たちにMバッケエ（バ

ツケエは《おば・おばさん》と呼ばれて高く遇された例(二節参照)と一致する。「呼び分け」に束縛されないうジ・バツケエ組は、ここでも活用されている。

アジャ・ヤンムキといった家庭内における親族称呼が、そのまま外に向かつての立場称呼になるのは、おおむね同じ中・下層の間においてである。上層からの呼びかけはまた種々ある。

旧家F家の当主は前述のXの場合同様、全ての村の中・下層の男子を呼び捨てにしていたが、F家の主婦は、下の男子たちに対して、夫とは一段違う言葉遣いをしていた。出入りの村人の多くを○ヤンムキと呼んでいた。

上層の庶出男子で、母方の姓を名のる某は、F家の女たちからは○ヤンムキと呼ばれたが、村人たちからは○ヤクムキで遇されていた。この例などは、人物の出自が、同層からは軽んじられ、下層からは重んじられるという待遇の差を示している。「呼び分け」られる本人は、事毎に自らの出生の環境を感じずにはいられなかったことと思う。

親族称呼から、特に呼称から、転用された村社会における立場称呼は、家の格意識を二重三重に強調する結果をもたらしているといふ言いがいい。

従って親族称呼が家の名や個人名を離れて独立した用法を持つこと、年令層のみを表わす結果となるような用法を持つことは、大和浜方言では認められない。親族称呼のいわゆる虚構的用法への展開は、背景社会の身分制度に束縛されているこの方言の体系からは、未だ見られなかったという結果を得た。

六、親族称呼の運用面(一)——待遇表現との関係——

大和浜方言には、対称の人称名詞に $na(a)$ と $ja(a)$ との二種がある。(自称は wa 一つあるのみ)。

ナーは目上、っヤーは同輩・目下に向かつて用いる。ナーを《あなた》、っヤーを《おまえ》とおきかえるのが普通だが、周知のとおり、現代本土共通語では目上に向かつて対称を以て話すことはほとんど無い。目上には相手の役割(職業名・親族称呼等)を以てして、対称の使用はさし控える習慣である。ところが大和浜方言のナーは父母をはじめ目上に向かつて用いて構わない。一節で訳したような《あなたさま》の語感が全てに当たるとは言えないまでも、ナーと《あなた》が等質でないことは、わかまえておかねばならない。っヤーの訳語も、同輩という点では《あなた》《あんた》《おまえ》が本土にはある。位相の違いが介入してことはが選択されるから、どれか一つを訳語として固定させるのは困難である。ただっヤーを用いるときは動詞語尾に敬語表現をとらないのが普通であるので、《おまえ》を訳語の中心に据えるという措置をとっておく。

大和浜には動詞語尾の部分に表われる敬語表現は、尊敬・丁寧の二種であり、尊敬・丁寧の順に付く。(なお謙讓表現は尊敬表現の或る種のものと同様に語彙面にのみ存在する。)次に、語尾接続の例と語彙の例とを挙げる。

たとい家の格の低いことが解る称呼であろうとも○アジャ、○ヤンムキ、△アゴ、……と名前に称呼をつけて呼ぶことは敬意を以て遇することであるから、対称にはナーを用い、語尾には敬体表現を

共通語		大 和 浜 方 言				
		常 体	敬 体			
			尊 敬	尊敬+丁寧	謙譲+丁寧	丁 寧
1	飲ム	numuri	numinsjoruri	numinsjorjooi		numjooi
2	噛ム	xamuri	xaminsjoruri	xaminsjorjooi		xamjooi
3	食ベル		misjoruri	misjorjooi	ʔiθadaxjooi	
4	話ス	ʔjuuri	ʔinsjoruri	ʔinsjorjooi	sirarerjooi	ʔjooi
5	居ル	'uri				'urjooi
6	来ル	xuri	ʔimoruri	ʔimorjooi	'ogamiga	xjooi
7	行ク	ʔixjuri				ʔixjooi

表 III 動詞の敬体の例

以て話すのが、大和浜での礼儀である。Oは自家の使用人として馴れ親しんだ相手のことをのみ呼び捨てにしていた。世代も年も上の男衆ではあったがFのことを名前だけで呼び、っヤァで話しかけた。使い手Oにしてみれば、それは軽侮の念には無縁の、親しみと甘いのもった表現であった。しかし、現在ではもう周囲がその言葉遣いを許さない。往時にも、自分の子どもが上層の子どもから呼び捨てにされるのを抗議して来た親があった。友人どうしはOkwa《○ちゃん》を用い、敬語表現は略すという形で落ち着いた。使用人の中でも子守 kwamuri が、育てた主家の子どもにっヤァで話しかけていたのは極めて例外的な慣習であった。

親族称呼の選択とあい俟って敬語表現にもかなり敏感なのが村での言語生活であった。

七、親族称呼の運用面——誰を原点として呼ぶか——

「どれ、お父さんに貸してごらん」とか、「みんな、おねえさんについていらっしやい」「そこにしゃがんでいるばく、名前は何て言うの?」というような表現は、現代日本語の共通語にはごく一般的なものである。この親族名称と人称代名詞の用法を支配する法則を鈴木孝夫氏は次のように説き明かしている。

ある特定の親族集団内では、目上の者は目下の者が自分を呼ぶ、まさにそのことをひき取って、自分のことを称する。

親族(家族)内の対話に見られる自称詞、対称詞の使い方の原則は、殆んどそのまま、家族外の社会的状況にも拡張的にあてはめることができる。

大和浜方言の場合はどうか。

いま、親族称呼を用いて呼ぶ側をegoとし、呼ばれる側を対象とする。言語活動を形成する話し手と聞き手と話題の三要素に、この二者(egoと対象c)の重なる具合によって、親族称呼の運用面にどんな現象が起こるか。

20頁の表IVは、仮にA、B二人の話し手を定めて、a、b、c五種類の聞き手を構え、同じ人物および話し手自身を話題の中の親族称呼の対象に据え、その組合わせの中で、運用の実際を並べたものである。どんな条件の下に、ego(称呼決定の原点)の移動が起きるか。

表IVの語るところによれば、(1)聞き手が話し手と同層あるいは上層である限り、話題の対象を捉える名称は話し手を原点とするものである。しかし(2)聞き手が話し手より下層であり、対象が話し手と同層のときは、親族名称を選ぶ原点は聞き手に移動する。(話し手A、聞き手d、対象aの例を見よ。)目下を原点とした名称が選ばれ、ということのは、本土共通語に通じる用法である。

聞き手が同じ目下でも、(3)同層年少の場合はどうか。話し手Aは自分を原点とした名称を変えない。(A・c・aの例を見よ。)対象aのことを、cを原点として(aはcの《父》であるから)ジューと呼ぶ、ということはない。本土でいう「目下」は現在年齢輩行が優先する概念であるが、明治大正の大和浜方言では、階層優先の概念である。親族名称の原点選択の場面にその差がはっきり出る。

次に(4)話し手が自身を対象に据えるときの呼び方を見よう。聞き手が同層であろうと、上下異層であろうと、自身は常に自称代名詞(ego)を用いて呼ばれる。本土共通語で特徴的な用法、すなわち目下を聞き手としたとき、自身のことを目下に原点を移した親族称呼で呼ぶということは、この方言には無い。

大和浜方言で(2)と(4)とが矛盾しないのは、この方言と本土共通語とで、前述のように「目下」概念が異なるからであると考えられる。

すでに断片的に触れたことも含めて、親族称呼の体系に働く構成原理のあり方を見るのに、この現象も一つ加えて検討しなくてはならない。

八、親族称呼成立の一例——ジューについて——

三たび、一家の家長⇨主婦のカップルの称呼について、問うてみよう。

使用人や村人たちからアッシュと呼ばれるとき、上層の主婦は自分の社会的立場が呼ばれているのを感じる。血のつながった子どもたちは、彼女をアンマと呼ぶ。アンマは日本上代語のオモと関係があるらし、琉球方言では多く同じ形か(首里語平民層他)、似た形(久米島他)で諸所に見られ、いずれも《母》である。一家の主婦は血縁を表わす称呼アンマと、立場を表わす称呼アッシュの二語を己が両面に持っている。

一方、家長の方は、家族内の父親たる面と、社会に対した《旦那さま》の面とで、称呼が変わらない。

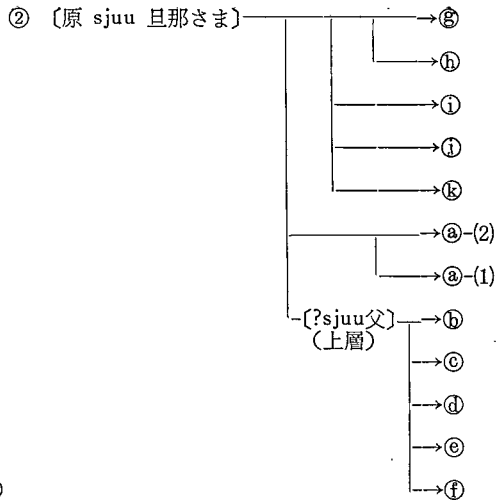
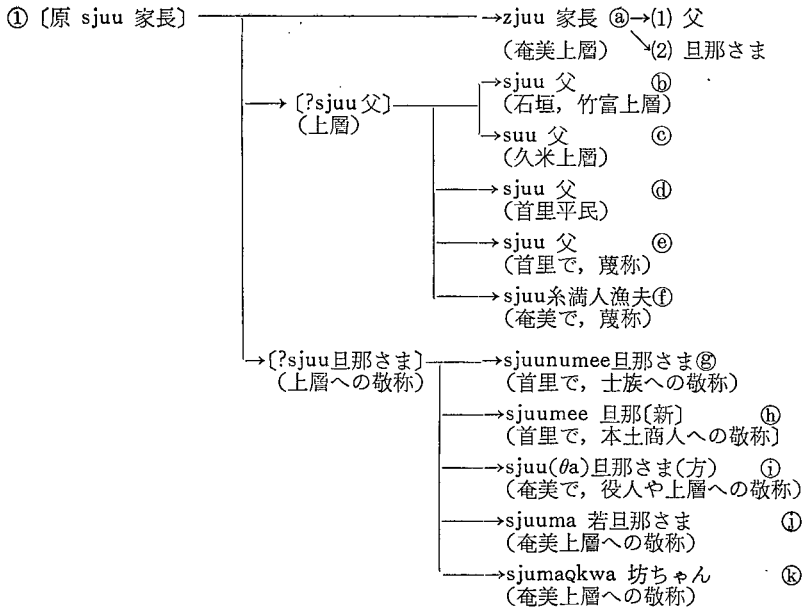
両面を一語で背負ったこのジューという語は、どういう成立ちの語なのか。本来血縁関係を指したものが拡張して立場表現となったのか、その逆か。そしてジューに、《(1)父・お父さま (2)旦那さま・御主人さま》という訳語を、称呼の原点の異なりのままに、いちいち充てはめてゆくのでよいのか。

私は、(1)(2)の訳語は下位に挙げ、それらに先立って、未分化の

聞 手 呼 称 対 象		話手A上層青年 (a, b夫妻の甥) B下層主婦 (a, b家, A家出入りの)									
		a 上層家長 Aのおじ		b 上層主婦 aの妻・Aのおば		c 上層少年 a, bの息子・Aの 年少いとこ		d 下層家長 a, b 家使用人		e 下層少女 dの娘	
		A	○'uzi	△ baqke	○kwa	○'janmī	△				
		B	zjuu	ʔaqsje	○sjumaqkwa	○'janmī	△ ʔagoqkwa				
名 称	a	A	(naa)	○'uzi	○'uzi	zjuu	zjuu				
		B	(naa)	zjuu	zjuu	zjuu	zjuu				
	b	A	△ baqke	(naa)	△ baqke	ʔaqsje	ʔaqsje				
		B	ʔaqsje	(naa)	ʔaqsje	ʔaqsje	ʔaqsje				
	c	A	○kwa	○kwa	(naa~ʔjaa)	○sjumaqkwa	○sjumaqkwa				
		B	○sjumaqkwa	○sjumaqkwa	(naa)	○sjumaqkwa	○sjumaqkwa				
	d	A	○'janmī	○'janmī	○'janmī	(naa)	○'janmī				
		B	○'janmī	○'janmī	○'janmī	(naa)	○'janmī				
	e	A	△	△	△	△	(ʔjaa)				
		B	△	△	△	△ ʔagoqkwa	(naa~ʔjaa)				
	話手	A	(ʔwaa)	(ʔwaa)	(ʔwaa)	(ʔwaa)	(ʔwaa)				
		B	(ʔwaa)	(ʔwaa)	(ʔwaa)	(ʔwaa)	(ʔwaa)				

注 (1) 括弧内は自称・対称の人称代名詞 (2) ○は男子の名前, △は女子の名前 (3) -kwa は《-ちゃん》

表 IV 親族称呼運用の一例 (人称にも関連させて)



注(1) [] 内は推定形。

(2) 首里語の例は『沖縄語辞典』による。

(3) 石垣, 竹富, 久米島の例は比較に便利なよう原表記を変改した。

(4) 奄美とあるのは大和浜, 名瀬, 古仁屋の諸方言。

表 V 奄美 zjuu の成立過程

《上層の家の家長》という訳語を挙げるべきだと考えている。

ジューが沖繩・奄美の諸島に数多く見られる sun, shin 系の語の一つであると考ええると、意味の分化は表V①②に示した二様の経過が想定される。

②のように、先に階級的（主従関係を示す）意味があつて、親族称呼に転じる例は、たとえば本土現代語の「主人」が、(1)（主従関係の）主人(2)（妻からみた）夫となることや、「あるじ」が(1)首長(2)家長(3)（妻からみた）夫という順を辿ることなどある。意味変化の捉え方として充分成り立つ。

しかしなお、①の場合の優位を私は主張する。ジューは形こそ少し変わっているが、未分化の《家長》という意味を継承して来た語だと言いたい。（石垣島や久米島のジューやスーもあるいは《家長》かもしれないが、資料の記述ではわからない。）

子がその父をジューと呼ぶときは、血のつながりによる親しみや甘えがその言葉にこめられているであろうし、使用人が、ジューと札するときには、威や力への屈服感が余計に働くという違いは、当然あるであろう。しかし共通して使い手の意識に宿っているのは、大きな権限と共に責任を持って、自分たちを庇護しかつリードする、信頼と服従の対象たる家長の姿である。時代を越れば越るほどその《長》の統べる範囲は、一族一統のより広い範囲であつたかもしれない。

《家長》の持つ二面が分化して、ある地域では《父》性のみを、別な土地では《主人》性のみを表わすようになったのは、意味の自然な移り変わりであろう。

ジューを使って成長したOが、成人後東京で「おとうさま」とい

うことを覚えたとき、初めの内は「おとうさま」に《旦那さま》の意味も含まれていると思つていたら、私は直接報告されたことがある。報告者は最初ジュー「おとうさま」という翻訳を行なつていたのである。この内省はのちに同じ人が「旦那さま」も学習してのち、初めて可能になつたのであろう。

奄美の親族称呼の一つ一つについて、少なくとも沖繩諸島に分布する同類の語との、細密な意味の比較が必要であることは言うまでもない。本土の称呼と対応する形の方が少ないのであるから、その方法が残された唯一のものかもしれないが、今の私には用意が足りない。

九、親族称呼の構成原理

(一) 呼称と名称。説明称。

親族称呼について論じるのに、呼称 term of address（呼び掛け語とも）と名称 term of reference（言及語とも）の別を注意すべきは固よりであるが、大和浜方言はこの点で、親族称呼が二つのグループに分かれるのが注目される。

先に階層によって二種の別がある称呼を「呼び分け」グループとしたが（二、三節参照）、「呼び分け」語は対象とする親族関係から言えば、直系上世代ならびに傍系同世代年長に属する、いわゆる目上である。これに傍系からうジ・バツケエ組を足した語彙が、呼称（名称）と名称の区別の無いこと）グループである。具体的な文例を以て示せば、次のどちらの文も成り立つということである。

zjuu, xan Jimoci ōaborii. [呼称と名称]

《おとうさま、こちらに おいで くださいませ。》

'waa zjuu 'jaa xuma nan 'uriiooran. [名称・説明称]

《私の父はここにいません。》

同世代の年少ならびに下世代の親族は、関係の近さ(弟妹)遠さ(いとこ他)や、直系(子、孫以下)傍系(甥姪他)の如何を問わず、呼称を用いず名前を以て呼びかける。年齢層を基本とする方の目下意識を際立たせる方法である。

傍系の上世代(親のいとこ他)と同世代の年長者(いとこ他)の呼称には、すでに四節で述べたように、まさに呼称≡名称のグループから同じ世代の語を借りて来て充てるのである。おじ・おばと同世代は関係のうすい濃いに拘らずうじ・バツケエが用いられ、もう一つ上の世代ではフッシュェやハンニェが家の名や個人の名を冠せて用いられる。自己と同世代のいとこたちその他には、同じく名前に兄・姉の語をつけて呼びかける。

呼びかけるのみではない。その人物を話題にして言及するときもまた、同じ呼称を用いることが実際の場面にある。次の例文を参照しよう。

○'uziqkwa, nama modorinsjorjoofti naa? [呼称]

《おじちゃん、いまお風呂になりましたか?》

Panna, ○'uziqkwa nu modorinsjorjoofti 'joo. [名称]

《お母さん、おじちゃんが今朝お風呂になりました。》

しかし第二の例文は話し手から見て内なる人物を聞き手としての発言であるから、正確な意味では「名称」と言えないものだ。「名称」とは、外なる人物に向かって、親族関係を示す語である。従って敬語表現も聞き手に対する丁寧表現を残すのみとなる。

'waa pifoxxo'uzi nu modorjoofti. [名称・説明称]

《私の親のいとこが戻りました。》

というような例が、それに当たる。

本土の共通語のように、呼称・名称の別のある体系では、その外側に更に説明的な語のあるのが普通である。(これを説明称と仮称する。)

【呼称】 【名称】 【説明称】

例(1) お父さま

お父さん

お父ちゃん

お父

おやじ

例(2) △おばさま

△おばさん

△おばちゃん

(まれに) △おねえちゃん

おば 父 父親 母 父の妹 姉

子どもや若い世代の会話にしばしば呼称を名称に用いる例が見られるが、今の所これは教養に欠けることとして敬語の問題と共に論じられる。

大和浜方言(と共に多くの琉球・奄美方言)のように、呼称・名称の別が無いという場合は、その呼称に恐らく対象に対する敬意が含まれていると思う。家どうしの関係を熟知し合った村落内部の社会であるから、正確な意味での名称の用いられる場面はむしろ少なく、一方呼称と区別のある名称は、説明称と近い質のものであった。

〔呼称＝名称〕

〔説明称〕

例(1) zjnu

ʔazja

ʔianmi

ʔjenganuʔja

例(2) (呼称)

ʔjenga

ʔonagu

baake

nuʔoʔja nu

ʔuʔutu

ʔoʔja nu

ʔoʔja nu

ʔoʔja nu

他は表II参照

(一) 性・世代・輩行

一 家族の中で一つ世代に多数の人間関係が生じるのは、言うまでもなく、家長夫婦にとっては子の世代である、きょうだい関係においてである。

大和浜方言できょうだいの総称は、kjoode、性別は異性から見る場合と同性から見る場合とで異なる表現を採る。姉妹から見た兄弟が ʔejeri、兄弟から見た姉妹が ʔonari と異性間では一次命名のことがしばしばある。同性間では ʔjenganukjoode 《女のきょうだい》、ʔonaganukjoode 《女のきょうだい》と二次命名のことはしかなない。

輩行は seza 《年長》と ʔuʔutu 《年少》の二語で表わす。前述の四語のいずれかと組み合わせることによって、どつという人を ego にした場合でも、その《兄・姉・弟・妹》を表現できることになる。

ヤクムキやアシエックワが呼称と名称を兼ねた称呼であるのに対してイエヘリ・おナリは説明称と言つべきであろうが、称呼の原

点をきょうだい内部の性別にかかわって定める点において、第三者から自由に捉えられる語ではない。遠い過去に、異なる原理から形成された関係称呼である。

一つの家族は夫婦関係を横軸とし、親子関係を縦軸として構成されているが、明治期の大和浜では、おおかた父系の家族構成であった、家長の親世代(以上)が同居しているのが普通であった。(隠居など別居の形をとるものは例外的であった。)

親族称呼を展望すると、どれを探っても、一称呼は性と世代と、必要な場合は輩行と、という個人的要素を表現している。しかも階層による「呼び分け」は、社会的要素の表現も同時に果たしていることになる。

(二) 家族構成との関係

家族構成に親族称呼の体系を重ね合わせてきちんと納まる場合と、そうでない場合とがある。たとえば病弱で婚期を逸した家長の妹が同居していたり、早くに夫を失って実家に戻ってそのまま老いた家長のおばが居たりすることは、明治期にはよく見られた暮らしである。女の側を仮に見てみると、フーハンニエーハンニエーアンマ——アシエックワという直系の関係以外のその人たち——本来ならば別の家の直系列におさまるべき女たち——が、どういう称呼を獲得するかと言えば、アンマに個人名を冠したり、アッシェを家族内にも導き入れたりした例が多い。継母をアッシェで呼び通す例もある。アンマはジューとは対照的に、社会性薄く、血縁性の濃い言葉である。身内・親しみ・軽みのニュアンスがある。逆にアッシェは社会性がより濃いから、外部・疎遠の意味合いがまつわって

いる。直系からはみ出した人物を、適当な称呼を以て体系内に納める知恵は、習慣の積み重ねによって得られたものである。

四節でも少し述べたことだが、ヤクムキ・アシエックワの二称呼は、人がそれを得る始まりは、若い世代であるが、決して若いという年齢層、世代に固定したものではない。時間の経過、年齢の積み重ねをその人間と共に辿る。同世代ということが意義特徴の中心である。その特徴を捨てて、異世代（上世代）に用法を広げるという現象（四、五節参照）は、既製の枠組みでは捉えにくい、微妙ななみ出し・劣り・軽みの表現を目標した知恵の産物である。ヤムムキの転義にも同じことが言える。

他に、ヤクムキに対する *yo* ヤムムキックワに対する *tanawa* アシエックワに対する *zokwa* など、恐らく形の省略化によって、対象のより年少な感じを捉えたり、親密さを表わそうとしたりした変種も採集されたが、これらは同世代間の域からはみ出てはいないので、ここに詳説する必要はない。

根本的な意義特徴を無視するということは、何といっても体系を内部から崩す遠因となる。既に時代は、旧体制を捨ててもお残る階層意識からの解放に向かつて、一筋に流れ始めていた。

十、親族称呼の近代化——ヤマとグチの移入——

村落の人口の大部分を占める下層の人たちにとって階層の差を持った親族称呼は、呼ばうにも、話題にしようにも、一々立場の自覚を余儀なくさせられるものであったから、個人差はあれ、苦痛であり重荷である面が強かったに違いない。

村落の経済機構の、そして政治事情の大きな変動に伴って、徐々に、本来の階層は現実の家の実力とずれ始めた。家単位の活動は減り、個人の器量が表面に出て来た。その新興の層が旧制度を反映する諸事項を否定してかかろうとしたのは、時代の当然の成り行きである。（ここに近代化と題したが、「近代化」という表現が常にプラスの価値を持つものであれば、この題し方に抵抗を感ずる旧上層の人がいても当然である。）

はじめは旧制度における上層用語へのあこがれに執して、それを取入れるという素朴な動きがあった。以前はアゴと呼ばれた女たちが、老いてフンマ《ばあちゃん》と呼ばれる年齢に達したとき、フンマを嫌って、曾て欲したアンマで呼ばせた。これはアンマに（新語）として《おばあさん》を加えるもので、世代を意識的に無視し引き上げている。

報告者の記憶に強く印象をとどめていることとして、ある時期に上層階級のある家で父親がアジャ、息子がヤムムキを以て呼ばせている例があった。自ら平等を意図したものか、使い手たちは故人となりその動機を尋ねるわけにもういかない。

方向は逆ながら異層の称呼をそっくり用いるという点で一致する以上のようなやり方は、所詮一時的な現象に終わった。

各層をまとめて、時代の要求を叶えたのは、同時代の本土のことばを積極的に採り入れることであった。奄美でヤマと《本土》と言えばすなわち鹿児島が代表する。明治期にはそれ以前よりも、鹿児島から移住して、文化面で村の生活をリードする人たちがふえた。たとえば教員など。また、明治期になってやっと村の生活に入ってきた貨幣経済の荷い手である商人も、当初は本土からやって来た。

義務教育も目を追って普及し、島の人々が共通語に接する機会も増した。ヤマとグチ《本土のことば》に接する機会は、目立って多くなった。

旧家F家でも長兄は父をジュニと呼ぶのに、大正期に入って長女はオとツチャンと呼んだ。それは鹿児島から来た女の先生の使う「良いことば」と意識され、模倣されたのであった。周囲では他にとーチャンもあったが、昭和期にはあまねくチャンが用いられた。

新しく移入されて、階層の意識に関係なく用いられたことばを左に掲げておこう。

チャン、とーチャン、オとツチャン

オツカン、かーちゃん、オツカサン

アニサン、ニーサン、ニーちゃん、ニ

ネーサン、ネーちゃん、ネ

バツパン、オバサン

注

これらの「良いことば」という感覚には、以前の階層意識は無関係であった。

親族称呼というものは、意外にも、全く異なる体系のことばを、個別的にも入れかえを行い、言わば大胆にとり入れるものである。人間の社会生活に欠くことの出来ない存在価値を持つ基礎語彙でありながら、体系のほとんどが、別の体系と入れ代わることも短期間の内に起こり得るものである。

その入れ代えを促し進めた言葉の内と外との要因が、村人の生活に及ぼしていた重さを、更めて感ぜずにはいられないのである。

注1 長田須磨、須山名保子共編、藤井美佐子協力『奄美方言分類辞典 上巻』笠間書院 昭和五二年四月

右辞典の「人間・人間関係」の部で、親族関係を表わす個々の語は、項目として掲げて訳語・解説を施してある。参照されたい。小考のテーマは、辞典の形式では扱えなかったものである。

また右辞典の「社会」の部には、第一節で扱った内容が、同じく項目別に説かれていた。

注2 鈴木孝夫『ことばと文化』岩波新書 昭和四八年

注3 ノロは南西諸島に生き続ける民間信仰の巫女であり、と

ネヤは、ノロが集まって先祖神を祈り祭る家である。奄美におけるノロ・とネヤについては、たとえは注1の「習俗・信仰」の部参照。

注4 この傍系親族語の擬似用法の広さを、称呼本来の用法と受けとめ、より古い時代の婚姻の形態の跡を留めるものとする考え方もあるが、今は採らない。妻が親族に向かつて夫のことを話題にするときヤクムキと言うのは、いろいろの問題を含んでいるが、私は、親族間で妻は自分の夫を敬して扱うべきものという士族の風によるものであると考えている。

注5 琉球諸方言の親族語彙については、次の諸書を参照した。

小川徹「南西諸島における親族称呼」『民族学研究』昭和三七年一二月

国立国語研究所編『沖縄語辞典』大蔵省印刷局 昭和

三八年

徳川宗賢「沖繩の親族語彙」『沖繩文化』一三号 昭和三年

平山輝男『琉球方言の総合的研究』東京堂 昭和四一年

中本正智「語彙」『琉球の方言 湯湾』法政大学沖繩文化

研究所昭和五一年 同「語彙」『琉球の方言 宮古大神

島』同 昭和五二年

なお本稿脱稿後、中本正智「沖繩の親族語彙」ならびに

加治工真市「八重山の親族語彙」柴田武編『日本方言の

語彙』所収 三省堂 昭和五三年を読む機会を得た。

注6

説明称とは話し手・聞き手に関係無く話題の中にegoをはっきり定めて示す関係称呼である。簡単なものから詳しいものまで多種あり得る。

説明称は呼称Ⅱ名称の体系の外側にも勿論存在するが、呼称と区別のある体系の名称に質的に近いものもそこには含まれる。

注7

うジ・バツケエは身分階層と無関係であるから、新語を積極的に要求する下地は無い。他の親族語に引かれ、かつ時代全般の風潮に従ってヤマとグチが導入されたものであろう。

[昭和五三・一〇・一〇]